

写真左から、あららぎ探究推進部の吉永明生先生、部長・志村克樹先生、森田直樹先生。

進学重視型単位制高校の高崎北高校は、1年次に全員参加による探究型のインターンシップを実施している。同校は5年前より、総合的な探究の時間にて「W・I・N…自分の興味・関心」「Needs…地域社会周りの課題や必要あること」「Academic…学問のつながり」の3要素を核とする3年間の探究プログラムを展開している。1年次は「自分を知る・学びを知る・社会を知る」が目標で、インターンシップはその中心的な活動だ。「2年次での探究活動につながる重要な第一歩」と、あららぎ探究推進部長・志村克樹先生は話す。同校のインターンシップのコンセプトは「2040年の仕事の未来を探究する」。

コンセプトは「仕事の未来を探究する」

2040年の未来を思い描き、「問い」を磨いて臨む探究型インターンシップ

「自分」と「働く」を重ねる高校事例

型にはまらない職業観を育成するために、各校ではどのような取組を行っているでしょうか。生徒が「働く」を自分ごととして捉えて将来に向かえるよう、学校外でのリアルな体験や活動を充実させている3校の事例をご紹介します。

「生徒が働くことになる社会をイメージしながら、興味のある仕事の未来について課題と仮説を設定し、実際の職場で仮説を検証する。」「自分なりの問いをもって取り組む点が、中学校で行う職場体験とは大きく異なります。単にその仕事の内容ややりがいを知るだけでなく、表現力、課題設定能力・仮説検証能力・コミュニケーション力、キャリア意識の育成を目指しています(図1)」(志村先生)

インターンシップ先の約6割が生徒による開拓

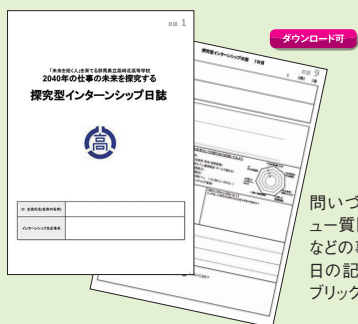
11月のインターンシップに向けた準備は1学期から始まる。最初の活動は、各自のW・I・Nに基づいたインターンシップ先を決めることだ。生徒は、学校が開拓したリストから選定するか、生徒自

図1 インターンシップを通して育成したい資質・能力

- 1 2040年のインターンシップ先の仕事の未来をプレゼンテーションできるようになろう【表現力】
- 2 自分なりの問いを立てられるようになり、インターンシップ中のインタビューで検証できるようになろう【課題設定能力・仮説検証能力・コミュニケーション力】
- 3 「学びたいこと(興味・関心)」と「仕事」とのつながりをイメージできるようになろう【キャリア意識】

身で新規開拓する。2つの方法に優劣はつけていない。重視しているのは、W・I・Nに基づいて主体的に決めることだ。そもそもどんな業界や企業があるのかを知らない生徒が多いため、企業情報デ

図2 探究型インターンシップ日誌



問いつくりやインタビュー質問事項の整理などの事前ワーク、当日の記録シート、ループブックなどを収録。

高崎北高校 (群馬・県立)

取材・文／藤崎雅子

図3 私の「問い」作成ワーク

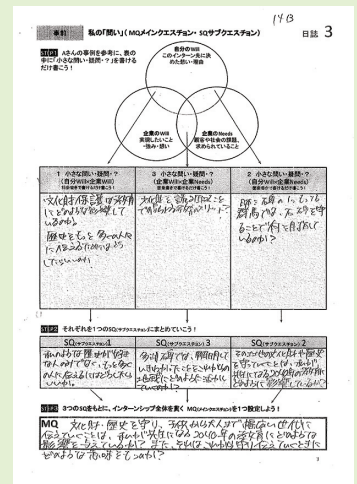


図2の日誌の一部。「自分のWill」「企業のWill」「企業のNeeds」の重なる部分から小さな問い・疑問を挙げ、MQとして集約している。

ず』という意識になり、『こんなところに行ってみよう』と目を輝かせて探そうになります」(吉永明生先生)

そのなかで自己開拓の数は年々増加。2024年度は協力事業所162件のうち自己開拓は約6割。東京や静岡、広島など県外の企業も開拓した。そして、協力事業所へのアポイントメントは、学校が作成した共通の実施要項を用いて、生徒が直接行う。162件すべてを集めた事前説明会は現実的ではないため、教員による5分程度の趣旨説明動画を作成し、その視聴を通じて、目線合わせを行っている。

企業のWill・Needsも踏まえ自分の問いをつくる

次に、2040年の仕事の未来についての「問い」の設定に取り組み。「どんな問いをもつて臨むかでインターンシップでの活動内容が変わってくる」と吉永先生。その重要性は生徒に繰り返し伝え、意識づけているという。

問いづくりの起点には、「自分のWill…そのインターンシップ先に決めた想い・理由」「企業のWill…その企業の理念や社会的価値」「企業のNeeds…その企業が社会から求められていること」の3つを置いている。しかしながら、多くの生徒は企業のWill・Needsを挙げるだけの知識がない。まずは図書館の新聞で関連する記事を探し、インターネットの情報調べ、企業・業界の状況を知ることから始める。

そのうえで、ワークシートに沿って問いづくりを行う(図3)。まず、前述の3つを掛け合わせた「自分Will×企業Will」「企業Will×企業Needs」「自分Will×企業Needs」にある、小さな疑問をできるだけ多く挙げる。それらを3つのサブエスチョン(SQ)にまとめ、さらに全体を貫くメインクエスチョン(MQ)を一つ設定するという流れだ。

実際に先輩が作成したMQを例示しながら、「一般論ではなく自分のWillが入っている」「個別企業ではなく業界全体に言及している」「社会課題を踏まえている」「自分なりの仮説がある」など良質な問いの特長を説明(図4)。ワーク中は教員が教室内を回って「これはどういうこと?」などと質問し、問いを磨く支援を行う。そうして、例えば「2040年の保育園は、保育士の人手不足や未就園児の受け入れなどの社会課題をどのように解決し、どのように自己表現のできる子どもに育てるのか?」といったMQをつくる。

「壮大な問いを設定し、その答えがインターンシップだけでは得られないことも多々あります。実態とのギャップに気づくだけでも、その職業や業界への固定観念を打破する良い機会になるのではないでしょうか」(森田直樹先生)

職場インタビューを行い仮説を検証する

3日間のインターンシップ中の活動内容は各事業所によつてさまざまだが、従業員へのインタビューは必ず依頼している。生徒は事前ワークでMQ・SQを基に質問を準備し、相手の話を引き出す工夫をしてインタビューを行う。

インターンシップ終了後は、仕事の体験やインタビューで学んだことを踏まえて仮説の検証を行う。その内容は資料にまとめ、報告会で発表する。報告会には、2年生のほかインターンシップ先の方も招き、ルーブリック評価やコメントをもらう。

「学んだことを表現して他者に伝えることは、本取組のポイントの一つ。校内だけでなく、外部からも評価を得ることを重視しています。資料作成や発表方法は細かく指導しないのですが、生徒はそれぞれで工夫して、お世話になった方を前に緊張しながらも嬉しそうに発表します」(吉永先生)

仕事に対する見方の刷新や肯定的な社会観に手応え

こうした探究型インターンシップが

ら生徒が得るものは、体験の充実感や満足感だけではない。実施前と後の生徒アンケート結果を比較すると、「自身の人生への興味」「人生を自分の力で切り拓いていく意欲」「希望する生き方に向けた学習意欲」など、さまざまな項目のスコアが上昇している。

職業観に注目して事後アンケート結果を見ると、本取組を通じて「社会へより関わりたいと思えた」「働くことが楽しみに思えた」「企業や仕事について、より調べてみたいと思えた」という回答はそれぞれ9割を超える。フリーコメントには、「仕事への興味のもち方がガラ

図4 メインクエスチョンづくりのコツの説明資料より

★問いの中になんと「私」がある。ジブンゴト化できてる。 ★社会課題(しかも2つ)がコンパクトにまとまっている

私が職についた 2040 年には、働き方改革によって一層高まった建設業の人員不足

がどのように解消され、自分の考えや思いを形にできる仕事になっているだろうか?

★企業の Will=「建設業は自分の思いを形にする仕事だ」がきれいに表現できてる!

★情報・広告業界の課題選択がよいよね

2040 年の情報・広告業界は、インターネット上サービスにおいて、課題である個人情報流出など様々な懸念をどのように解決し、どのようなサービスや情報を発信していくのか? ★こここの部分が企業の Will=役割になっている。

前年度の生徒が作成した「問い」の文章を分解して、自分のWillや社会課題がわかるポイントを示している。

図5 生徒アンケート「インターンシップをきっかけに変わったと思うこと」

- 前の自分は仕事に対して大変そうというイメージしかもっていなかったけれど、インターンシップをやってから仕事への興味のもち方がガラリと変わったので、もっといろんなことを調べていきたいと思いました。
- 自分が興味のある分野以外の企業も、今回私が行ったインターンシップ先と同様にどんな技術や願いをもって仕事を行っているのか、という観点で見つめるようになった。年上の人と会話をするのが楽しくなった。
- 美術館の地域貢献の仕方、運営の仕方がわかった。屋外の企画展示の準備を行った時、地域と企業が協力して展示作業を進めていたのを見て、コネクションや力を貸してもらえるような誠実さをもつことの大切さを知った。一つの物事にも多くの人が関わっているのだと意識できるようになった。
- インターンシップ前は、単純な理由でこの職業になりたいって感じだったのが、このインターンシップをきっかけに、もっといろいろな職業を調べ、自分の興味関心のある職種を比較して自分にとって最適な選択ができるようになりたいと思えるようになりました。



生徒のインターンシップ先は多様な分野の企業、市役所、医療機関、学校などさまざま。写真はラジオ局(上)と産婦人科(下)での様子。

生徒インタビュー /

夢とロマンを守る仕事を通じ 学習の重要性や物の見方を学んだ



歴史が好きなことと教育の仕事への関心から、多胡碑という文化財の保護・管理施設でインターンシップを行いました。働く方のお話や発掘現場の繊細な作業の見学などから、地道な努力と時代を超えたチームワークで文化財が守られてきたことを知り、夢とロマンを後世に残す仕事なのだと胸が躍りました。また、文化財保護の仕事に私たちが学んでいる数学や理科の知識を垣間見て無駄な勉強はないことや、歴史の多面性から物ごとを多面的に捉える重要性を学んだことも、大きな収穫です。(1年生・久保日菜子さん)

ノーマライゼーションの時代への 期待と課題を考察



公認心理師の仕事に興味があり、心理相談室と児童発達支援事業所を自己開拓してインターンシップを行いました。今後、心の病や障がいをもつ子どもに対する公認心理師の需要が高まると考えています。すべての人が分け隔てなく生活を送るノーマライゼーションの時代に向けて、政府の支援や、多様性への理解者を増やす必要性を感じました。また、対面の直接的な対応を重視する両事業所において、SNSの普及や進化をどう活用していくべきなのか、新たな問いが生まれました。(2年生・浅香愛佑加さん)



インターンシップ報告会は少人数に分かれて実施。受け入れ企業・団体の方と2年生も評価を行う。

リと変わった「どんな技術や願いをもって仕事をしているかという観点で企業を見つめるようになった」など、仕事や働くことへの意識・見方の変化に言及する声が目立つ(図5)。本取組が職業観に好影響を与えていることがわか

る。
「学校の成績では目立たない生徒が、生き生き取り組むことも珍しくありません。前任の教員の研究から、教科学力に表れる認知能力と、本取組に表れる非認知能力との間に相関が見られないという結果も出ています。本取組で自信をつける、社会と関わっていくことを恐れなくなり、臆せず企業の方にメールを送り、依頼して断られることがあっても当然と受け止め、どこにでも飛び出していこうとする。肯定的な社会観が育っていると感じます」(森田先生)
インターンシップの経験は、2年次の個人テーマの探究活動につながる。2年生の浅香愛佑加さんは、インターンシップ経験を基に探究テーマを「ノーマライゼーション実現のために私たちが

できることは何か」と設定し、活動中だ。「障がいやマイノリティに対する偏見は無知から生まれる。まずは知ることが大切」と考え、1年生に対して手袋をつけて折り紙を折るなどの体験授業の実施や、多様性を表現するマークをデザインしてステッカーを配布するなどの活動を行っている。将来は多様な子どもを支援する人になるのが目標だという(左コラム参照)。
インターンシップにこれほど力を注ぐ進学校は、希少と言えるだろう。その意義の大きさは、生徒たちの成長する姿が何よりも雄弁に物語っている。「教科の授業に重点を置く進学校ほど、この取組を行う意義は大きい」とし、同校は今後もさらにこの取組を発展させていく方針だ。